

Christian Worker's Seminar

「聖書と私達—現代社会における人間像」

土 肥 昭 夫

同志社大学神学部は昨年にひきつづき、今年も5月19日～21日、北小松の同志社学舎でYM, YW, キリスト教社会事業団体に働いている人たちの再教育を行なった。この人たちは今日の教会と社会を結ぶ一つの接点であり、彼らが真にキリスト教信仰にもとづき、現実の要請に応えつつ、如何なる生き方をしてゆくかということは、きわめて重要な問題である。神学部はこの重要性を考え、この人たちの活動に協力するために、このようなセミナーを計画した。

今年の主題は「聖書と私達—現代社会における人間像」であった。昨年の参加者の強い要請にもとづき、今年は3回のべ6時間にわたり聖書を徹底的に学びとり、その中で自分のキリスト者としてのあり方を基本的に問い、そこから現代社会に生きるまことの人間像を追求するという方法をとった。さらに今年は講義や講演をきくのみならず、それらに即して参加者が少数のグループにわかれて共同研究を行ない、その総括を最後に出してゆくことを計画した。この方は時間が不足のため必ずしも十分しなかったという反省が後のべられた。このセミナーの Director は土肥昭夫、Associate Director は山田美代（京都YMCA 総幹事）、酒井哲雄（大阪YMCA 主事）、中村遙（大阪水上隣保館長）の諸氏であった。参加者は全員で28名、なかには東京より来られた方もあった。

以下セミナー、聖書講義、総括の要旨と参加した一人の印象をのべてみたい。内容の責任はあくまで筆者にある。

セミナー I 「いわゆる「期待される人間像」について」 鶴見俊輔氏（同志社大学文学部教授）

この問題を考える時二つの概念がある。すなわち、ある人間を期待する場合、主として合成と成長の方法がある。前者はある体制に合わせて人間をつくるという意味で化学的合成といわれ、後者はある一つのものをもって生きる人間という意味で自然的成長である。この合成的考えは、明治維新以降明治政府がとった態度で、近代の人間を如何に上から合成することが彼れらの課題であった。更に合成方式を用いて教育勸語や学校をつくり、科

学自体もそれにくみ入れていった。1945年の敗戦を契機として、この方式は、なんら根本的に変革されることなしに、新たな合成方式を出して来た。それが今年になって中教審から出された「期待される人間像」である。以上のことからして、日本国家が利用しているものは、この合成方式の思想に他ならない。

われわれはここで注意せねばならないのは、明治10年代以降の有力な人々は、合成方式に自分を含ませて育った人々であったが、明治10年代以前の人々は合成方式ではなかったことである。つまり坂本竜馬、橋本左内、高杉晋作、田中正造のタイプは明治の後期においては、ほとんど見い出せない。彼れらは自由のために封建時代そのものに対して闘ったのである。特に田中正造は、足尾銅山鉱毒事件において、一方において農民の暴動をとめて政府に陳情すべきことをすすめる、他方において鉱毒地に住みこんで、徹底した抵抗運動をこころみた。われわれは明治國家の運動の表面にある指導者板垣、伊藤、井上らに目を奪われて、その裏側にある彼のような指導者に目を閉じてはならぬ。このような姿勢、こういう人の強さ、それはまさに「期待される人間像」におりこまれた合成方式のそれではなく、自然成長のタイプであった。それは何かのパターンや權威によらないで、自分で考え、行動し、自由に自己を形成する人びとである。われわれは合成方式の人々よりも、この自然成長の人びとに学ばねばならない。

現代社会は合成方式の採用されているが故に、自然成長の人々は、機会がなく、またそれに包み隠されてしまう危険性がある。しかし自然成長の人々は、いつの時代にもありうる。戦後の激動期にある学生にも、自然成長していく人間が多数いる。たとえば、北九州市で労働運動にたづきわった谷川雁、超国家主義の挫折の中から立ちあがった吉本隆明の自由な創性的活動は注目されるべきである。まさに現代社会において期待される人間像は自然成長的人間の類型にその方向が求められよう。

鶴見先生の話しは大変興味あるものであったが、これをきいた者たちの中で、それがキリスト教的人間像とどのように関係するののかという疑問が生まれた。筆者は思うのであるが、鶴見先生のいう自然成長型の人間はあくまで自己の主体性を問う人間である。この主体性の確立の基礎を追求する中で、人間の罪悪や、福音による救いが問われ、かくして福音による人間形成の問題が生まれるのではないかということが考えられよう。

セミナー Ⅱ 「日本におけるキリスト教的人間像」 土肥昭夫氏

われわれは現代の日本の社会の中で生きている。この生き方を問うときに、戦後20年の歴史が展望されねばならぬ。

まず、日本人はものすごい戦争とはじめての敗戦を経験した。しかしその後日本は比較的早く復興した。したがってある人たちは戦争経験をいたましい挫折として、ある人たちはこれをなつかしい思い出としてうけとめる。このような二つの相反するうけとめ方の中から国家、憲法、平和の問題に対してきわめて対照的な考え方が生まれてくる。

次に、敗戦後日本は民主主義国家として再建されることになった。基本的人権とか話し

合いということが共通の言語になった。しかし民主主義が日本に定着するにしたがって、混沌現象もまた生まれた。たとえば家庭において親子や夫婦の正しい関係は確立されているだろうか。機会均等を目ざした大学教育の現実はこれでよいのか—といった問題はそのあらわれである。

次に、神武景気とか岩戸景気といった日本経済のおどろくべき高度成長の中で豊かさとともに貧困が生まれ、技術革新の発達が自己矛盾を露呈して来た。中小企業、農村、老人、公害といった問題は正しい政策によって処理されることなく、組織と企業の中に自己を表失したいわゆる非人間化の現象があらわれた。

最後に、国づくり、人づくりのスローガンのもとに日本人のモラルやナショナリズムを再評価するところみがあらわれ、伝統的価値観の堆積の上に日本人のあるべき人間像を梓づける人たちと、その否定の上に新しい人間像を形成しようとする人たちがあらわれた。

このような現代の日本人の生き方に対してキリスト教ほどのかかわってゆくのか、を考えてみたい。

まず、福音を現代の日本をつなぐものはまさに日本人キリスト者であることを知らねばならぬ。わたくしたちがお互いにキリストにつながるものとして、この日本にどのように生きてゆくかによって、福音は日本に生きるかどうかが決められるのである。

キリスト者は義人にして罪人であるといわれる。キリストによって救われるとは、キリストが神と人間の和解者となりたもうたことである。キリスト者はこのキリストをとおして神との正しい人格的關係に生きる。しかし彼はなお自らの内と外に罪のとりこにある現実をみる。この事柄の意味を正しくとらえるところに、キリスト者は現実に対する適確な洞察力を持つことが出来ることになる。悲観にも楽観にも通じないで、現実的に事態をとらえ、これに対処する力を持つ。

さらに、キリスト者となることは古い人間としての価値観や人間性をキリストによってぬぎすて、そこより解放されたものとして、新しく生きることを意味する。彼はそこで伝統的な価値観に対してキリストにある主体性をもってあるいは抵抗し、あるいは応答するという方法をとおして、まことの価値、まことの人間をうみ出してゆくものとなる。

このようなキリスト者の三つの基本的あり方の上に立って、現代の日本に生きるキリスト教的人間像をいくつか明らかにしておかう。

まずナショナリズムの問題について。日本人キリスト者は日本の歴史的伝統、利害、使命に対して正しい評価を行い、これを荷ってゆく責任がある。これをもっと具体的にいえば、日本国家の基礎にある憲法にどうかかわるかということである。これを日本人の共通の言語として、考えてゆきたい。

次に産業社会の問題について。キリストは教会の主であると共に世界の主である。そこでキリストと教会の關係がキリストと社会の關係の中で生かされるように、キリスト者の責任ある行動が期待される。労働、技術、報酬が神学的にも社会的にもどういう意味を持つのかを考えてゆきたい。

最後に家庭問題について。ここにおいてこそ真のあたらしい人間關係を確立するところ

みが行われねばならぬ。小市民的で閉鎖的なものにならないで、キリストと教会の關係が新しい家庭づくりの基礎ともなければならぬ。

セミナー Ⅲ 「社会の要求と私たちの応答」指導 酒井哲雄氏

このセミナーではこれまで学び、考えて来た現代社会における人間像を参加者全員が共に整理するために、二つのグループにわかれて討議し、その成果を相互に批判し合った。酒井氏の指導の下に参加者は自由奔放に現代社会の中で正しい人間像とおもわれるものを数十の語で提出し、これを短い文章にまとめあげていった。その間において二つのグループとも討論や、整理の方法を体験的に学習していった。

聖書講義 「聖書に描かれた人間像」 遠藤彰氏

(I) 序

われわれはここで旧新約聖書における人間像をとらえ、それが現在にかたりかける意味を考えたい。その方法として聖書を歴史的な文書として吟味し、その動機を探究することにより、神のかたりかけをきくことにしたい。

(II) 旧約聖書の人間像

(1) 人間性を表現する概念の解釈

- (i) Rūah (創世1:2, 6:3, ヨブ33:4) 神の息、霊の意味で、人間の生命の根源に神の生命をみる。神は一切を創造し、神の言は創造の力そのものである。神のかたりかけによって生命は出現する。
- (ii) Nephesh (創世2:7, 9:5, エゼキエル 37:5ff.) 息、生命の息で、人間の人格を示す。神の息によって人間は「我」となる。人間の生の尊厳の根源は神のかたりかけに由来する。それを失えば人間は枯れた骨である。
- (iii) Bāsāl (創世7:21, イザヤ40:5) 肉で、人間をあらわすが、神との対比で、人間の持つ弱さ、もろさを語る。

(2) 人間性を表現する章句の解釈

- (i) 創世1:26, -28, 2:7-25 神は創造の主役であり、人間はその被造物の一つである。創造における神と民の關係は契約においてつくられる。そこに正しい關係が生まれ、民は矛盾や対立の中にあっても、力あふれる生活に生きる。
- (ii) イザヤ 29:16, エレミヤ 18:1-11 旧約を一貫するものは人間を自己完結的、独立的なものともみないで、神によって独立性を与えられたものとしてみる。
- (iii) 創世 3:1-24 人間は自由を与えられつつ、罪への方向にある。エレミヤはこの罪を個人的主体の中にとらえた。イスラエル人の考え方は集合的人格として人間をとらえる。個人でありつつ、全体に参与するものとし、個人の中に全体の反映をみる。罪の問題もこのように考えられる。
- (iv) イザヤ6:1-8 神の聖性の前に立つ人間の罪、そこにある隔絶性、そしてそれにも

拘らず神はこの人間を救い、きよめる。そして人間はこの神の生命をうけるときに、生き、動き出す。平和は静的でなく動的にとらえられる。

(v) ダニエル 7: 13-18 罪をおかし、契約を守らぬイスラエル人に対する救いは神より来たる。

(vi) イザヤ 53: 1-12 苦難のメシアの中に来たるべき救いをみる。

(3) 結論 旧約において神との正しい関係に立つ人間の姿が明らかにされる。この正しい関係におくものが契約であり、そこに平和がある。しかし人間はこれにそむく。この人間を神は救い、人間を生かしめる。かくして人間は人間となるのである。

(III) 新約聖書の人間像

(1) 人間性を表現する概念

(i) Pneuma (Ⅰコリ2: 11, Ⅱコリ3: 17) 旧約の Ruah に相当する。神の霊は人間の霊を生かすものとみられる。

(ii) Psyche (コリⅠ15: 45) 万物がこれを持つ、生の活動の根源であり、人間の性格を示す。

(iii) Sarx (ロマ7: 5, 8: 7, 15: 39) 自然的存在としての人間、死をになう人間、ひごとにはろびゆくべきもので、神の国をつぐことは出来ない。

(iv) Soma (Ⅰコリ15: 40, 6: 13) 外的人間性で人間の弱さ、罪をになう。またキリストによってあたらしくされ、キリストに生きる存在も示す。

(2) 人間性を表現する章句の解釈

a) 共観福音書

(i) マルコ 5: 1-20 ゲラサの狂人の中にキリストに会うまでの人間をみる。それは自己喪失の人間であり、この喪失は他の力による。これに対してキリストは人格的な関係に入りたもうた。人間喪失より解放は異常な出来事となる。しかしある人々にはイエスは迷惑な存在となるけれどもどこまでもイエスについてゆく人間がある。このことは別に異常なことではなく、日常性の中で実現される。

(ii) マルコ 8: 27-38 イエスのメシアとしての行為は苦難のみちであった。イエスにしたがうものもそのみちを歩む。

(iii) ルカ 5: 1-11 イザヤ 6: 1-8 と同じ内容である。人間の自己喪失がキリストによって救われ、真の人間となり、キリストの証人となる。

(iv) ルカ 10: 25-37 この中でイエスは傷つきたうれた旅人とよきサマリア人という二通りの形であらわされる。キリストが罪人のために傷つき、その苦しみを荷うことにより、キリスト者はキリストの愛の対象から、キリストにある愛の主体となって働く。

(v) ルカ 19: 28-40 キリストは大いなる権威を荷いつつも、人の子として僕の形をとってやってくる。その彼に人間を喪失状況から回復する力がある。その力をうけた者は第三者が阻止しようとしても、しきれない喜びのうたをうたう。

b) パウロ

(i) ロマ 1: 18-32 ロマ 1: 18-3: 20 は人間の存在喪失の状況をかたる。異邦人、ユダヤ

人の区別は民族的なものではなく、宗教的なものである。異邦人としての人間は存在するがそれが基本的なものに立脚した存在の仕方を持たない。彼らは自らを投げかけて神の動的真理に生きないで、自然的、密儀的融合の中に自己を埋没させている。

(ii) ロマ2:17-3:20 ユダヤ人としての人間の場合、律法がその生の基本的なものを示し、契約はその保証である。しかし彼らは律法を客体的に権威化し、神との人格的対話の世界に生きていない。さらに律法は人間を果して自由にするだろうか。律法は霊的であっても、それに限界がある。人間の無能力がそれである。しかしその故に律法は無意味なものとならない。それは福音への守役となるからである。

(iii) ロマ6:1-14 われわれはイエスの復活にバプテスマにおいてあづかる。イエスはバプテスマをうけたとき、自らを第二イザヤの苦難の僕の中におくことを決断した。バプテスマはゲッセマネにみられるように苦き杯であった。信仰者もバプテスマにおいて自らその僕として生きることを決断する。そこに新しい人間が生まれる。体はかわらぬが、肉による体は脱ぎ去られ、霊による体キリストによる体となってゆく。

(iv) Ⅱコリ5:17 キリストにある新しい人間は三通りの生き方をする。先ずそれは人間の存在喪失から自由にされ、キリストに全存在を投げかけた生き方、次にキリストの体に終末論的に参与する。そこで決定的な自己否定、時間否定をうけて、キリストの中に自己を投与する生き方、さらにキリストに随従する生き方である。

(v) Ⅱコリ6:2-10 「何も持たないが、すべてのものを持っている」という逆説的生がキリスト者のあり方である。彼は人間の存在喪失の極限状況にありつつも、生きぬく力を附与されて、自由で主体的な生き方が出来るのである。

c) ヨハネ

(i) 3:1-15 人は水と霊によって新しく生まれかわる。水は旧約では神の言の象徴である。ヨハネではさらに霊が加えられる。霊によって水はまことの水となり、人間を生かす力となる。

(ii) 8:31-47 イエスの言葉のうちにとどまるとは彼との対話の関係に生きることであり、それが真理に生きることを意味する。真理は体系的ではなく、生きた対話の関係としてみられている。このように生きるところにまことの自由がある。

(iii) 11:23-27 未来に終末を期待する素朴な終末観に対して、今ここで起きる終末がカタられる。イエスの問いかけによって終末が起きる。彼を信ずることによって死ではなく復活が、存在喪失ではなく、存在の回復が生まれるのである。

(IV) 結論

人間は神によってつくられた。その基本的な在り方は旧約において示され、保証されている。しかしその契約が律法として具体化され、実際の生活の中でみられるとき、人間の存在喪失がおこる。キリストとの対話の関係に生きるときに人間は新しくされる。キリストにしたがうまことの自由な人間としての生き方がそこから生まれてくる。

特別講演「日本における教会と社会に関する宗教社会学的分析」ロバート・

リー氏（サンフランシスコ神学校教授）

世界教会協議会の伝道に関する研究部門は世界の中12ヶ所をえらんで、その地域における教会と社会の問題を研究している。私はその委託で日本に昨年来在住し、この問題を考察して来た。その一端を紹介しよう。

私は東京で5つの教会をえらんで資料をあつめた。スラム街の教会、労働者の教会、都心の教会、山手の教会、大学町の教会で、それぞれがその特色を持っている。

そして問題をとらえるのに *Srangeness* を考察の方法とした。外来者への態度は儒教などには存在しない倫理であり、キリスト教の伝道に固有な問題である。その態度にはまず無関心より出発して、一方では好奇心、警戒心を持つ歓迎、心よりの歓迎、他方では疑惑、反感、迫害という方向が考えられる、前者にすすむ教会は生長し、後者にすすむ教会は衰退するという仮説を私は考えた。そして日本という社会がキリスト教にとって異教世界であり、日本人はキリスト教に対して *Stranger* であるから、これに対する教会の反応の中に教会と社会の問題を考えたく思うのである。

いくつかの問題を指摘しておく。まず日本人がキリスト者となることは日本の社会では *Stranger* となることである。したがって教会は比較的自由な環境にあるものたちによって構成された自由教会である。また日本人キリスト者は近所の人たちを教会に結びつけることを好まない。彼はそこにおけるトラブルを知っているからである。したがって日本の教会は地域社会の中であくされた教会 (*incognito church*) である。また日本の教会の持つ知的水準の高さやピューリタンの倫理は教会を社会より疎外させ、これが日本語の困難さ、伝統的価値観と相俟って教会をますます *Stranger* の教会としている。その意味でキリスト教の上着化の問題の今後とも日本の教会の問題となってゆくであろう。

総括

最後のまとめに入るまえに、3つのグループにわかれて、こんどのセミナーの評価や問題点を話し合い、その報告から、いくつかの事柄を論じることになった。

① 現代の具体的な問題を論ずる前にこれを論ずる自己のキリスト者としての主体の問題をふかく追及する必要がある。これを聖書によって徹底的に問いただされたことはよかった。そこから福音に生きる主体性、バックボーンが与えられることを確信した。さらに聖書をふかく学ぶとともに、キリスト者として自分の職場で精一杯やってゆきたい。

② 現代の社会をどうみるのかをもっと基本的に明らかにする必要がある。この問題については、キリスト者はこの世をわると言い切るのでも、またよいとするのでもない。彼は一方において神に反逆し自己を喪失したものとみなながら、他方においてそこに召され、そこでキリストに随従し、真の人間として生きるものとして、この世をみる。

③ キリスト者の現代における生き方は主体的でなければならぬ。主体的であるとは具体的であることで、歴史のさまざまな状況の中で具体的に決断し、行動することを意味する。したがってこれを安易に一つのものとして決めかかったり、またそこからキリスト者はこ

ういうものというレッテルをはることは間違っている。

④ このほか、日本の教会の教派的分裂から生じる悩み、YM, YW など中間的教育の場にあるものの悩み、キリスト教的職場の故に生じる問題などがかたられた。

Christian Worker's Seminar に出席して (大津 健一)

私はこのセミナーに二つの問題をもってのぞんだ。一つは、今私の持っている問題をこの場でより明確にすることであり、もう一つは、それをどのように自己の中で展開し、具体的に与えられた場にあてはめていくかであった。私はこの問題を立てる前に、一つの結論をすでに持っていた。それは、われわれキリスト者の活動がすべて聖書から出、聖書に帰らねばならないということであった。

この結論は、私が机の前に坐って考え出したものでなく、ある特定の場所—筑豊—に置かれ、どうにもこうにもならなくなった時、出てきたものであった。

このセミナーの出席者の大部分の人々は、YM, YW, 社会事業関係の人びとであった。そして若いエネルギーを持った人びとばかりで、私自身そのことに出席する意義を見出したのである。それは、私は一人ではないんだという、こみあげてくる感激と、キリスト者としての連帯意識であった。ある人びとは YM, YW に、ある人びとは養護施設に、ある人びとは保母として。この喜びは、キリスト者だけが味わえる喜びであろう。

そのような中で彼ら自身、大きな問題をもっていた。それは彼ら自身のキリスト者としての生き方の問題であった。それはキリスト者自身の自己反省と“それでは”という問題であった。このような問題に今回のセミナーが十分にアプローチできたとは思わない。しかしこの問題を求心的に聖書に求めていったことは正しいといえるだろう。

特に、今回のセミナーのテーマは自己にはねかえってくるものであった。まさにわれわれが共に考え合った人間像は、われわれのものとならねばならなかった。その意味で、今回の“人間像”は私との対決であった。

勿論、この問題にどれだけの人びとが、どのように対決したか考える余地がない。しかし問題は、それだけでは終らない。問題はこれを主体的に受けとめた私が、いかに reaction をしていくかである。私は最初に提示した私の問題を明確にできたと思わない。しかし最も大切なものを一つだけ、このセミナーで得た。それは最初に提示した結論にどうしても戻らねばならないということである。